Letters
Arpak
レターズ アルパック
VOL.245　ISSN 2432-5295

雨あがり

CONTENTS

◆【雨あがり】…01 ～ 04
◆新人紹介…04
◆今、こんな仕事をしています…05 ～ 08
◆近況&イベントのお知らせ…08 ～ 10
◆まちかど…裏表紙

雨あがり

私の世代で「雨あがり」といえば断然「雨あがりの夜空に」でしょう。ご承知の方も多いと思いますが、ロックバンドRCサクセションの代表曲の一つです。作詞は忌野清志郎。歌詞はダブルミーニングと言われていますが、特に中盤に出てくる言葉が素敵です。

♪雨あがりの夜空に輝く
　　雲の切れ間にちりばめたダイヤモンド
♪雨あがりの夜空に流れる
　　ジンライムのようなお月様

雨あがりの夜空の、雲の切れ間にダイヤモンドのように星が輝いている。そこにジンライムのような月が流れていった。

「ジンライムのような月」という詩的な表現が独特です。

みずみずしい感性で自然と向き合い、詩的な言葉で語る。清志郎はもういないけれど、みならいたい部分です。

レターズアルパック編集委員会

雨あがりと日本人

水野巧基：
公共マネジメントグループ

学生時代に、留学生から「日本人は雨との付き合い方が上手だ」と言われたことがあります。思い返せば、雨があがると号令がかかったかのように、マンションの住民がベランダに出現し布団を干していた光景が幼少期の記憶として残っています。今では、ランドリールームを設置する家が増えたことや家電の普及によってなのか、あまり目にしなくなりました。他にも色々と思いつきますが、雨があがるとすぐに行動するのが日本人の特徴なのかもしれません。

歴史を遡れば、戦国時代では雨を利用した戦法によって戦況が大きく変化した事例も多いです。その点で、個人的にすごいと思う戦術家は織田信長と豊臣秀吉です。

桶狭間の戦いでは、今川本陣北方の山中から迂回奇襲攻撃をしたことが通説となっていますが、近年になって新説が出てきています。合戦直前に豪雨となり今川家は兵力を分散させるなど油断しており、雨あがり直後に織田軍が銃撃戦を仕掛けて今川軍が総崩れになったという新説です。他にも長篠の戦いでは、信長軍は梅雨明けのタイミングに合わせて武田軍への進軍ペースを落としたのではないかという説も出てきています。銃撃戦を得意にしていた信長軍として信憑性は高いかなと思ってしまいます。歴史小説ですが、「梅雨将軍信長」という作品もありますよね。

豊臣秀吉は、「水攻め」の戦法が有名ですが、高松城での水攻め実施後に本能寺の変が起こり、山崎の戦いで明智光秀に勝利します。この戦いでも雨が降っていたようで、少数の明智軍の銃撃戦を警戒して雨の間に戦を仕掛けたのではないかとも言われています。

歴史話が続きましたが、現代の話に戻ります（ここから私の小噺も雨あがりかな？）。

現代を過ごす私には、雨あがりの楽しみ方があります。乳幼児が2名いるので、雨のお出かけはとても大変です。なので、雨あがりのタイミングを狙って、買い物に出かけるのです。その時に、2歳の娘はお気に入りのレインコートを身にまとい、長靴を履いて水たまりを踏みながら駐車場に向かいます。雨あがりに雨を楽しむ娘を見ながら、私の頬と財布の紐は緩むのです。そんな日が過ごせる梅雨も悪くはないものですね。

虹

内野絢香：
生活デザイングループ

LGBTQIA＋のコミュニティの多様性を表す象徴ともなっている虹色の旗「レインボー・フラッグ」から連想されるのは、「No rain, no rainbow」という言葉です。雨が降らなければ、虹もでない。雨が降るからこそ、虹はでるという意味にもなります。

多様なジェンダーやセクシュアリティの存在が知られていくようになった今、レインボー・フラッグが代表とされるプライドフラッグには、30以上もの種類が存在しているそうです。それぞれのフラッグには込められた思いや歴史、もちろんその意味も異なります。

多様性が尊重される今、数えきれないほどの多様性を社会は、そもそも私はどのように受け止められるのでしょうか。

昨年度、高校生向けのライフデザイン冊子の作成をお手伝いしました。その中で、LGBTQIA＋や婚姻制度、育休制度等、これまで私の人生において登場回数が少なかった言葉や制度を調べ、ややこしい条文にもふれ、今の日本の原則論や限界にもどかしさも覚えました。

例えば、「事実婚」は婚姻関係に該当すると思いますか？

婚姻について、現在日本では届出制がとられており、届を出し、受理されることで婚姻の状態となれるのです。そのため、婚姻の中には事実婚は含まないというのが原則です。

日本では、夫婦別姓が法的にはまだ認められておらず、いまだにパートナーシップ制度がない自治体もあります。多様性を尊重している風潮を醸し出しても、社会の理解や制度が現実に追いついていない感覚を覚えます。実際に私も、掘れば山ほどでてくる多様性をどこまで受け止めることができるのか自信がありません。むしろ、多様性を受け入れられない人も一定いるのではないか、いて然るべきであり、それも含めて多様性だと考えます。ただ、これまで社会がつくりあげてきた「普通」に苦しめられてきた人が、少しでも生きやすくなってほしいと思います。

日本ではいまだに冷たい雨が降り続き、降りやまないと感じている人もいると思います。少しでも早く虹がかかるように、まずはこの現実を少しずつ知ることから始めていきたいと思いました。

野球の話

山口泰生：
地域産業イノベーショングループ

「雨あがり」と聞いて、非常に難しいテーマだと悩みながら、何を執筆するか自分の部屋で考えていました。ふと目線の先にあったのが、野球のグローブでした。話はかなり遡りますが、私は小学校3年から中学3年まで野球をしていました。もともと転勤族ということもあり、小学3年生の時に、横浜から大阪に引っ越して来たのですが、引っ越して早々、父親に地元の少年野球チームに連れて行かれ、なぜかお試し体験という形で練習に混ざりました。父親の会社の同僚がたまたま野球チームのコーチを務めていたため、「せっかくなら来てみたら」と言うことで、父親と一緒に行ったそうです。父親がもともと野球をしていたこともあり、また幼少期から野球で遊んでいたので、あまり深くは考えずに、少年野球チームに入部することになりました。

そこから7年間ほど野球をやり続けることになり、試合に勝ったり負けたり色々とやりがいも感じていましたが、当時は練習が辛すぎて何度も辞めたいと思いながら続けていました（今の時代だったら一発OUTな練習内容だったと思います）。そのため、「雨」の影響で練習が中止になることが、私を含めメンバー全員にとって最も嬉しい出来事でありました。練習日の2日～3日前になると天気予報のチェックは欠かさず行い、雨の予報だとガッツポーズをしていました。ただ、予報どおり、中止になる時はよかったのですが、直前で天気が回復するということももちろんあり、その際は「雨あがり」の中、きつい練習が待ち構えていました。私にとって、「雨あがり」はどん底に落とされる瞬間だったなと記憶しています（それでもなんだかんだ続けられたのは、仲間の助けもあったからだと思います）。

アルパックに入社して今年で3年目となりましたが、もちろん仕事の中で辛いことに直面することはあります。ただ当時の練習に比べたら、身体的にも精神的にも辛いことは一切なく、今となっては良かったなと思います。今年も野球で培った「根性」を武器に頑張りたいと思います。

いつか思い出す

山本貴子：
地域再生デザイングループ

２００９年の初夏、とてもチャーミングでパワフルな人に出会いました。その人は定年を機に、まちづくりに取組みたい、子どもが子どもらしく遊べて原風景となるような公園をつくりたいという強い想いを持っていて、私はその想いに共感し、数人の仲間とともに、「公園づくりの会」という市民活動を始めました。

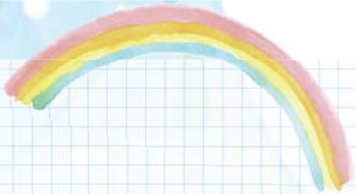
これまで、公園の改修案を区に提案したり、プレーパークを企画したり、いろんなことにチャレンジしましたが、いまでも続いているのが、年に一度の「水まつり」です。公園に特大プールを持ち込んで、水鉄砲の的あてゲームやドジョウつかみ等水にまつわる遊びを行い、毎年、小さな公園に３００人くらいの親子が集まります。15年もこの活動を続けていると、いろいろなことが変化していきます。まず、私たちについて言えば、会のメンバーが大きく変わりました。年に一度のイベントであっても、何かを続けることは簡単ではないなあと、つくづく感じます。そして、参加者について言えば、子どもの〝映え写真〟を撮影する親御さんが目に付くようになり、子ども達の水着はカラフルでおしゃれなものが多くなりました。こんなところでも、時代の流れを感じます。

ただ、そうした中でも変わらないものがあって、やっぱり子どもは無邪気で純粋です。時代が変化しても、人が元来持っているものは変わらないし、人が成長する過程では、まわりの環境がとても大切で、大人の、社会の責任は大きいなあと感じます。そして、きっとそれは、大人にとっても同じで、大人も、成長するためには、自分のいる場所や環境をきちんと選ばなくてはいけないとも思うのです。

いつも、「水まつり」が終わると、雨あがりのように、公園のあちこちに水たまりができて、その中を名残惜しそうに、子ども達は帰っていきます。イベントの企画や準備、運営費のやりくり等、大変なことは多いけれど、子どもたちが大人になったときに、いつかこの公園でみた風景を思い出して、励まされたり、前向きな気持ちになれるといいな、そんな風に思いながら、今年も「水まつり」の準備を進めています。

「雨あがり」から想う

杉本健太朗：
アルパック OB



「雨あがり」と聞くと、一定期間雨が降り続いた後、止んだ瞬間の光景が思い浮かびます。雲間から光が差し込み、道には水たまりがぽつぽつと広がり、湿気を多く含んだ空気がむわっと匂うような、あのなんとも言えない感じです。雨が降っている間は、屋内で外の様子を伺いながら、雨が止んで外に出ると、なんだかすがすがしい気持ちになります。晴れて気候が良い時期には、屋外に出たくなるのに、雨が降っている間は、家の中でゆったり過ごしたくなります。

以前、「内と外」について、建築プランニング・デザイングループ内で自由に議論したことがありました。今回のテーマ、「雨あがり」について思考を巡らせていると、雨という存在も、建築の内と外を分けている一つの重要な要素であることに改めて気付かされます。雨が降っている時に、雨にあたるのが屋外、雨にあたらないのが屋内、また、雨にはあたらないが、壁が無くて外気に開放されているのは半屋外というように捉えることもできます。

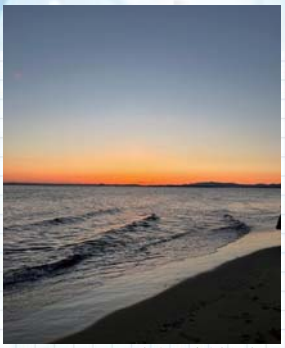
そして雨を防いでくれるのは、建築の要素のうち、主に屋根です（他にも具体的にイメージしますと、ピロティ空間、バルコニー下、階段下など雨に濡れない空間はあるとは思いますが）。屋根の形状にも、切妻屋根、片流れ屋根、陸屋根などバリエーションがありますが、それぞれ意匠的な見え方と雨の受け流し方の工夫の結果とも捉えることができそうです。

そもそも建築の定義には、いろいろな考え方があるとは思いますが、建築基準法を見てみますと、「建築物　土地に定着する工作物のうち、屋根及び柱若しくは壁を有するもの～」とありまして、建築物の定義にも屋根は出てきます。雨をよけるという役割を持つ（他にも日よけの役割もありますが）、主要構造部の一つである屋根は、雨との関係の中で構築されてきたと捉えてもよさそうです。

さて、雨と建築についてあれこれ考えている中で、日本列島は、北から南、東から西に至るまで、四季折々の様々な変化に富んだ気候、そしてそこに根付いた風土がありますが、各地を訪れた際には、単にその土地の見聞を広げるだけでなく、空間的な認識に加えて、雨が降っている時、雨があがった時など、時間的な経過も意識しながら、これからもあれこれ建築について妄想していきたいと思います。

雨あがりは新しい始まりの時

芳田知紀：
都市再生・マネジメントグループ


三重県津市香良州海岸で見えた初日の出

雨が降ると、どこか気分が沈むことがありますね。傘をさして歩くのもひと苦労ですし、服や靴が濡れてしまうと不快な思いをします。しかし、雨あがりには、そのネガティブな気分が一転し、何か良いことが起こる予感がする瞬間があります。雨あがりは、まさにネガティブな状況からポジティブな状況への転換点だと思います。

今年は大晦日から元旦にかけて、雨が降っており、日の出に影響するかと思われましたが、日の出の時刻には雨があがり、透き通った空に美しい初日の出を望むことができました。この光景は、まるで新しい年の始まりを祝福しているかのように感じたのを鮮明に覚えています。雨が洗い流した空気は澄みわたり、太陽の光が一層輝いて見え、新しい1年の始まりを感じさせてくれました。

また、雨は植物にとって恵みの水でもあります。雨が降ることで、地面は潤い、植物たちはその水分を吸収して成長します。雨あがりに陽が差すと、植物たちは一段と活き活きとし始めます。雨のような苦労を一時的に不便に感じることはあっても、その後の恩恵を感じられる豊かな心意気を大事にしたいと思っています。

私自身の経験を振り返ると、昨年度は非常に忙しい日々を過ごしました。新卒として、右も左もわからないまま、多くの失敗を重ねながら少しずつ基礎を身につけてきました。その過程は楽しさや充実感がありながらも、苦労を感じることもありました。年度末までの業務が一段落し、新しい年度を迎えるこの時期は、まさに雨あがりのような気分です。過去の経験や知識という「水」を得て、それを今年度にさらに活かし、成長していきたいと思っています。

雨あがりには、空が明るくなり、植物が活き活きと育つように、私たちも新しいスタートを切るチャンスを得ることができます。雨の日々が続いたとしても、その後には必ず晴れの日が訪れるのです。その瞬間を楽しみに、日々を前向きに過ごしていきたいものです。

新人紹介

「1／2還暦　折り返し」

太裕と書いて、ひろやすと読みます。「名前なんて読むの？」、これまで30年間の人生で何度も聞かれたセリフです。人間関係のスタートとしては自然に自分に興味を持ってもらえている気がするので、名付けに関わった全てに感謝です。

大学院卒業後、エネルギー関係の会社を経て、還暦の折り返しの年齢になった今、アルパックに入社したルーツは、思い返せば大学生時代の「国内調査実習」という講義でした。教室に座って講義を聞くだけでなく、フィールドワークを行い、地域社会から学びを得ることに面白さを感じたことが自分がまちづくりに興味を持つきっかけとなりました。

その「国内調査実習」の講義を担当されていたのが、金井萬造先生でした。

都市再生・マネジメントグループ：藤田太裕

「魅力あるまちづくりに向けて」

熊本県水俣市で生まれ、福岡県北九州市、千葉県船橋市、兵庫県川西市と転居し、大学時代は広島県東広島市で過ごしました。

これまで様々な地域で暮らす中で異なるまちの姿や人のつながりに興味を持ち、大学では都市計画を専攻しました。その中で、中山間地域における地域自治組織の維持をテーマに自治組織や行政職員をはじめとした地域の皆様と深く関わりながら研究を行いました。

また、様々なプロジェクトに参加することで地域に入り込み、地域の皆様との関わりを通して地域の個性や魅力、課題を見出すことの大切さを学びました。

これから仕事をする上でも地域の皆様の思いを丁寧に拾い上げ、課題や個性を見出すことで、地域に寄り添った魅力あるまちを実現できるようにしたいと考えております。皆様どうぞよろしくお願いいたします。

都市・地域プランニンググループ：城本大暉

「学び続ける」

滋賀県の永源寺でのびのび育ち、自転車で50分の一番近い八日市高校に通い、祖父が大工で父が施工管理という理由で家から近い滋賀県立大学の建築学科に入学。都市計画に興味を示したきっかけは、都会に出た友達に「都会にはなにもない」と言われ、家のすぐ裏が山の田舎者の自分が調査しようとしたことです。

修論ではGISを使って滋賀県のJR駅周辺地域の市街化可能性について検討し、活動では滋賀県長浜市の中心市街地活性化について取り組んできました。そのため大学院ではデータとフィールドの2つの側面から都市に関わりました。また副専攻では地域診断やコミュニティ・ビジネスを学びました。

アルパックでは日本中の地域が抱える課題に真摯に向き合い、特に地方に着目して課題解決や活性化に積極的に参画し、何事も学びがあると捉えて頑張ります。

地域再生デザイングループ：丸山泰誠

「産業文化都市かりや」を景観から読み解く

依藤光代：
ソーシャル・イノベーティブデザイングループ

刈谷市は、自動車産業が盛んな愛知県の三河地域にあり、トヨタグループの主要企業本社が集積している産業都市です。

大正12年に豊田紡織株式会社が刈谷に試験工場をつくったのが始まりで、のちに国産自動車の開発が行われ、工場が建ち並ぶようになりました。

その刈谷市は、第8次総合計画の将来都市像に「人が輝く安心快適な産業文化都市」を掲げています。1968年に「生産文教都市」を都市像として以来、「産業」は刈谷という都市に欠かせないものとなっています。

では、「産業文化都市」とは、どのような都市なのでしょうか？産業が盛んであることは、まちや文化にどのような影響をもたらし、市民にとってはどのような意味があるのでしょう。産業の成長と都市の姿はどう関係するのでしょうか。これらを景観に着目して読み解いていき、「かりや景観れぽーと」として冊子にしました。

「まち並みをつくる産業」、「働く場としての産業」、「公共空間を豊かにする産業」、「まち・ひとを育てる産業」の4つの側面から取材していきました。都市中心部に集積している企業群は、単に「工場」や「本社ビル」がそこに建っているということを超えて、まち並みにスタイリッシュさ、おしゃれさ、緑の潤いを積極的に生み出す要素となっています。企業の文化や意識を、建物デザインや外構の緑化が表現しているように思われます。

また、昭和30年代にはすでに工場が建ち並び、その力強さは市内の小・中学校の校歌に「世紀を照らす工業」「栄ゆく」「雄々しこの街」などとうたわれ、工場が集積する眺めは市民にとって昔からずっとシンボルであったことが分かります。

さて、産業の成長に伴い、刈谷駅周辺では土地区画整理事業が行われるなど、街も成長し、景観は大きく変わってきました。これからも、産業とともに、産業文化都市刈谷は成長し続けていくのでしょう。

企業がオープンスペースとして開放している街角の写真を、表紙にあしらいました

奈良県の土地の管理・利用に向けた白書作成と人材育成講習会の開催支援

髙瀬咲・石井努
地域再生デザイングループ

空き家・空き地、施業放置林、耕作放棄地等、低管理の土地に関する課題が顕在化する中、奈良県では、令和5年4月に「土地の適正な管理、合理的な利用及びより効果的な利用により地域経済の発展及び生活の向上を図る条例」を施行し、土地の管理・利用を推進しています。

アルパックでは「奈良県土地白書」の作成支援、土地の適正な管理・利用に向けた、「県内市町村職員（都市地域／農・森林地域）」「民間事業者（宅建事業者等）」向けの講習会・研修会の開催支援を行いました。白書作成、講習会・研修会の実施にあたっては、県庁内の関連セクション、奈良県内の事業者や市町村、地域で活動する団体、学識経験者等の方にヒアリングを行い、様々な課題や展望等を具体的に聞き取り、奈良県の実情に沿った成果につなげられるよう県内外を奔走しました。

その結果、白書には統計的なデータだけでなく、県内外の先進事例や県内でキラリと光る取組を展開されている人物にスポットライトをあて、「大和（やまと）の土地守（とちもり）」として、コラム形式で紹介することができました。

市町村職員向け講習会ではヒアリングでのネットワークを活かし、県内外で先進的な取組を行っている方々や専門家の先生をお招きし、取組紹介・パネルディスカッションを行いました。

事業者向け研修会では国土交通省近畿地方整備局から国の最新の制度等もお話いただき、土地の管理・利用に関しては全国的に共通した課題があり、制度等の情報を追っていくことが必要だと実感した一方、課題解決のためには土地柄や、その地域で活動する人、地域の魅力について知った上で、それらが活かせるネットワークを構築していくことが非常に重要であると勉強になったお仕事でした。

奈良県の皆様に読んでいただきたいのはもちろんのこと、読み物としてもおもしろい白書となったかと思いますので、皆様ぜひ奈良県ホームページからご覧ください。

市町村職員向け講習会の様子

「東高瀬川ビジネスコミュニティ」がキックオフ！

高野隆嗣：
地域産業イノベーショングループ

昨年5月号でご紹介した「東高瀬川ビジネスパーク構想」（既報239号）の実現に向けて、2つの大きな動きがありました。続報をご紹介します。

同構想は、サムコ株式会社の創業者辻理会長の呼掛けにより、この地に縁の有る企業経営者有志が集まり、「らくなん進都」の中心に位置するご当地で、次代の京都の産業活力を担う拠点化を目指すものです。昨年3月に京都市長に手交以来、メンバー内で議論を重ね、「東高瀬川ビジネスコミュニティ」（以下；東高瀬川BC）がこの度発足しました。

代表には辻理会長、副代表には京都市成長産業創造センター長の平尾一之京都大学名誉教授が就任。地元の産業支援機関や金融機関等も参画し、今後は構想実現の要として、勉強会や各種活動を推進する予定です。

また、東高瀬川BC発足を記念して、3月18日にはキックオフ・シンポジウムを開催しました。百年続く産業機械メーカーとして日中印土を拠点に活躍する生田産機工業の生田泰宏社長、世界初の小児心臓疾患の術前シュミレータで先般医療機器薬事承認を取得したクロスエフェクトの竹田正俊社長、龍谷大学研究フェローの白須正先生など、ご当地に縁の有る諸氏が京都発の世界展開を語りあうパネルディスカッションを行いました。また、辻理会長による基調講演では、島津製作所や任天堂など名立たる京都企業が、高瀬川との縁が深いことを歴史的に紐解きながら、独自の経営とものづくりを続ける中堅企業を輩出することの重要性をお話頂きました。

今春の通常国会において政府は産業競争力強化法等を改正、従業員2千人以下の企業を新たに「中堅企業」と位置付けました。国内に9千社と言われ、大企業と異なり地方に多く立地し、良質な雇用の受け皿になっています。より多くの中小企業を中堅企業が成長すること、日本経済の持続的な成長に繋げることが期待されます。

東高瀬川BCの中から、世界で活躍する中堅企業が多数生まれていくこと、ご期待下さい。

風光明媚な「海と島の風景」を活かした景観計画を策定しました

筈谷友紀子：
ソーシャル・イノベーティブデザイングループ

南知多町の景観計画の策定支援を行いました。知多半島の南に位置する南知多町は、三方が海に面しており、篠島・日間賀島などの島々からなります。

人々と海の関わりは密接で、いまなお残る伝統的な祭りにも海との関わりが現れています。

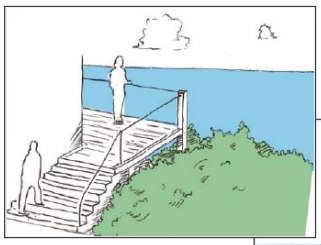
風光明媚な風景と歴史を次世代に継承していくため、南知多町ならではの風景から着想を得た独自の景観誘導策や、町民自らが景観資源を掘り起こし発信する「景観特派員」などの取り組みを検討し、景観計画として取りまとめています。

また、海と島という風光明媚な風景を活かした景観まちづくりの取り組みの一環として、眺望を活かした建物デザインアイデアを収録したガイドブック『うみとしまじま』を作成・発行しました。『『うみとしまじま』では海を見た際の感動を高めるためのアプローチの工夫や、心地よく海を眺めるためのワンポイントアドバイスを掲載しています。これをきっかけに南知多町の美しい海と島の眺望を多くの人が楽しめる拠点が生まれることを期待しています。

うみとしまじまはこちら

南知多町景観計画はこちら

南知多町公式ホームページより



高低差を活かして、特別感を演出する

「海と一体の」テラスをつくる

『うみとしまじま』より

北海道松前町のサスティナビリティに関する総合支援（2）子ども達と地域の関係性づくり

中川貴美子：
サスティナビリティマネジメントグループ

今、気候危機、人口減少社会など、サスティナビリティに関しこれまでの延長線上ではない、道筋が必要となっています。

２０２３年９月号で、北海道松前町でのプロジェクトの背景についてご紹介しました。観光、第一産業（漁業、畜産業）、地域経済循環、RE100、教育等様々なプロジェクトが動いている中、教育に関するプロジェクトをご紹介します。

人口減少への歯止めをかける中で、中長期的な取組として、一度町を出たとしても戻ってきたいと思ってもらえるよう、町内の子どもたちと地域とのつながりをつくることが何より大切と考えています。また、松前町でも様々なチャレンジができる環境であることを体感してもらえるよう、小中学校でのエネルギーと地域づくりの視点を学ぶワークショップ（以下ＷＳ）や高校の探究学習支援や地域外の大学生との交流の機会などを創出しています。プロジェクトを通じた様々な学ぶ機会の提供とともに、未来の担い手である子どもたちの想いを具現化していきたいと思っています。

町内報告会の様子（各プロジェクトともに、高校生、小学生も学習成果を発表）

取組のひとつとして、この５月にオープンした地域交流拠点TENOHA松前（東急不動産）のバス待合どころに設置するバスサイネージを、函館でプログラミング教室等を開催している、（株）函館ラボラトリさんと連携し、はこだて未来大学の学生さん、松前高校生・中学生参加のもと、アイデア出しＷＳを経て、手作りで設置しています。ぜひ、松前町のお越しの際は、ご覧いただけると幸いです。また、松前の教育に関する取り組みはこちらでも紹介しています。まつまえ未来ラボ :https://matsumae-mirai-lab.com/

５月にオープンしたTENOHA松前のバスサイネージ（はこだて未来大学の学生さん・松前高校生・中学生中心に作成）

赤塚四・五丁目地区にふさわしい建物デザインを考える“景観デザインワーク”を開催しました！

竹中健起：
都市・地域プランニンググループ

板橋区赤塚四・五丁目地区（以下、赤塚地区）では、令和５年度より景観まちづくりの取組を進めています。

このうち、地域住民向けの勉強会「フムフムあかつかPROJECT」の第３弾として、赤塚地区にふさわしい建物デザインを考える〝景観デザインワーク〟を開催しました。

〝景観デザインワーク〟は、赤塚地区が有する崖線等の〝高低差のある地形〟や、参道等の〝みどりと歴史があるまちなみ〟といった、魅力的な景観資源に調和する建物デザインとはどのようなものかについて考えるものです。建物・屋根・柵・塀・植栽等の様々なイラストパーツを用いて、その場で〝選んで、切って、貼る〟という形で、地域住民の皆さんが考える赤塚地区にふさわしい建物デザインを、楽しく、視覚ベースでつくりあげ、そのようなプロセスの中で交わされた議論をもとに、ふさわしい建物デザインのあり方を言語に置き換え、計画に反映させるという方法で行いました。デザインワークの中では、「地形を生かしたテラスをつくりガーデニングしたい！」、「参道の並木に合わせて庭に木を植えよう」等、赤塚地区の魅力を活かした様々な建物デザインのアイデアが出ました。

景観をはじめ、地域住民にとって関心・理解が難しい分野を議論するにあたっては、いかにして地域住民の〝想像力〟を掻き立て、〝楽しく〟意見を交わすかが重要であるかを、改めて今回のワークショップを通じて実感しました。近年では、３Ｄ都市モデルとＸＲ・ＡＲ等を組み合わせたまちづくりワークショップの事例も増えてきています。ワークショップの目的に応じて必要なツールを選択し、より〝質〟の高い地域住民のアイデア抽出や市民参加の方法について深めていければと思います。

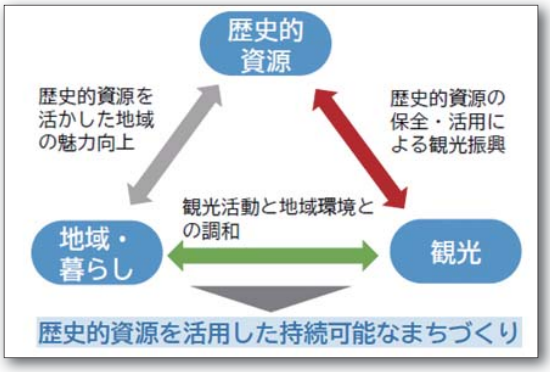
高低差を活かした建物形状・色彩を考える

歴史的参道に調和する緑や塀を考える

歴史的資源を活かした持続可能なまちづくりに資する事例の傾向整理業務を受託しました

筈谷友紀子：
ソーシャル・イノベーティブデザイングループ

歴史的資源を活かした持続可能なまちづくりについて、地域経済の活性化や住環境の維持改善、歴史的資源の適切な保全・活用事例について調査を行いました。



歴史的資源をめぐる社会情勢の変化として、オーバーツーリズムが挙げられます。これまで観光まちづくりの中で歴史的資源の保全・活用が進められてきたところがありますが、観光客の大幅な増加によりエリアの環境が悪化したり、歴史的資源そのものについても傷んでしまったりという状況が各地で見られます。

一方で、オーバーツーリズムの対策の一環として歴史的資源や景観保全が進んでいる地域も見られます。例えばスキー客が多い北海道倶知安町については土地利用規制（都市計画法）及び景観誘導（景観法）による自然資源の保全と資源を活かした地域の魅力向上を目指す取り組みによって自然と調和した魅力的なリゾート地の形成を図っています。特に、観光需要によって増大するコンドミニアム等の立地規制とデザイン誘導といったコントロール施策も展開しています。

金沢市では観光需要を活かして宿泊税を財源に歴史的資源の保全に取り組むほか、観光集中地区以外の地区の整備を推進するなど、観光（経済活動）・歴史的資源・市民生活が調和する持続可能なまちづくりを進めています。

当社では各地域の歴史的資源を活かした持続可能なまちづくりの取り組み事例について調査を行いレポートの作成支援を行いました。本調査結果は、国土交通省歴まち情報サイトにて今後公開予定です。

近況＆イベントのお知らせ

アルパック・パーソナル・ヒストリー・アーカイブプロジェクト リレーセッション　第２回　松本明

実行委員：内野絢香

第２回目では、前京都事務所長の松本明さんにお越しいただき、建築・都市計画の道を志した背景から、アルパックで携わった仕事、さらには今後のコンサルタントが確立すべき職能といった話等、幅広くお話しいただきました。

そもそも、「松本さん」についてですが、私が入社する前年度に退職され、直接お会いするのは、多分今回が初めてだったと思います。

「松本さん」については、今でも様々な場面で話題に上がることが多く、所員からは「アルパックの良心」や「京都市の都市計画や市民参加ワークショップのパイオニア」というような話を耳にしてきました。その影響もあり、「どんな人なのだろう」という期待が大きかった中でお話を聞き、所員が語る松本さんについて、少しだけ実感をもった理解ができたかなと感じています。特に印象に残ったお話が２つあります。

１つ目は、「京都でのまちづくり」についてです。用途地域の見直しのため、現地をくまなく調査した話や道路空間で交通量配分論が原則であった当時に、人中心の道路空間をつくりあげていくために行った工夫等、今につながる京都市をつくられていたという実感があり、住民のための都市計画をしていくためにどうしていけばいいかということを考えながら仕事をされていたように伺えました。

２つ目は、コンサルタントという職能についてです。今は、チャット GPT にまちの問題などを聞いたら、答えが返ってくるような時代になっています。情報が手軽に得られるようになった時代の中で、今後は専門性を確立することが難しくなるという話がありました。いつかは、都市計画マスタープラン（以下、都市マス）もチャット GPT にいれたら、作れるのではないかということも言われ、所員から、そんな中で今、都市マスをつくっていく意義についての質問がありました。松本さんからは、「都市マスも制度としては可能性を秘めており、そもそも、都市マスのように地域を計画するという行為は、都市を成熟させるうえで大切なことである。コンサルタントとして、まちで求められているものが本当に表現されているかというところを真摯に向き合うことで、意義を見いだすことができるのではないか。そのためにも、一緒に高め合っていけるクライアントを見つけられるかどうかも、コンサルタントとして大切なことかな」というお話もありました。

第２回目では社会を読み解きながら、コンサルタントとしてどのような立場で地域に関わってきたかを振り返り、今後私たちはどう関わっていけるかを、考えることができた時間になったのではないかと思います。

龍安寺・石庭を観る

三輪泰司：
名誉会長

スケッチの整理をしています。アルパック・アーカイブ・プロジェクトの一環のつもりです。

B 5版スケッチブックの約700点をファイル34冊に分類・整理しました。そもそも、何のためのスケッチなのでしょう？

都市づくりはまず「観察」することからはじまります。方法は、カズを数える、カタチを観る。ですから「絵」のようですが、スケッチの性格は、画家が描く「絵画」ではなく「記録」です。

ところがこの「記録」にひとつ問題が見つかりました。1952年5月8日の「絵」です。龍安寺石庭です。72年前、21歳でした。皆さんもご覧になられたと思います。昨今はインバウンドのお客さんに人気です。この「絵」は方丈に座って描いています。軒裏と縁板の間隔、その間の油塀と白砂。このプロポーションこそが見どころなのです。

今、重要文化財である方丈には入れませんのでこの「絵」は描けません。縁に腰かけてご覧になるのも結構ですが、それで観たつもりになってはいけませんね。

写真出典：龍安寺　ホームページ

1952年5月8日の龍安寺方丈石庭

適塾路地奥サロン報告

適塾路地奥サロン実行委員会

62回
2024年
3月7日

「観光分野のリソースを活かした観光まちづくりの方法」
講師　東京都立大学都市環境学部　教授　川原晋氏

第62回適塾路地奥サロンは、東京事務所に東京都立大学教授の川原晋氏をお招きし、観光まちづくりをテーマにお話しいただきました。

川原先生は都市計画のバックボーンをお持ちですが、観光まちづくりは都市計画と観光ビジネスの両面から取り組んでいくこと、その際には地域、観光者、観光事業者の三者が満足できる「楽しめるまちづくり」が必要であるとのことでした。旅館の中に観光者を取り込まず、まちなかへ展開していくための取組は観光事業者が主導する必要があるとのご指摘がありました。また、コペンハーゲンのボーンホルム島におけるショルダーシーズン（ピーク時前後の観光客がやや少ない時期）をねらった事業開発や、サスティナビリティを追求したホテルであるGreen Solution Houseなどの先進的な取組についてもご紹介いただきました。

これからの観光まちづくりのテーマとして、例えば緑化フェアのレガシーとして地域の緑を守る活動につなげていくなど、単にイベントをやって終わるのではなく、イベント後にレガシーをどう残していくのか（イベントレガシーの形成）、ロングストーリーツアーによる地域資源の連携や観光客とのタッチポイントとなるスルーガイド（すべての旅程に同行して回る観光ガイド）の重要性などについてのお話が印象に残りました。（坂井信行）

63回
2024年
4月5日

「もやもやと私的な内発性からはじまる社会変容」
講師　公共とデザイン共同代表／一般社団法人Deep Care Lab代表理事　川地真史氏

第63回適塾路地奥サロンでは公共とデザイン共同代表の川地真史氏をお招きし、「もやもやと私的な内発性からはじまる社会変容～ケア、まちづくり、そしてソーシャルイノベーションへ～」と題してお話を頂きました。

講演では個人の「もやもや」や「やってみたい」から生まれるソーシャルイノベーションについてお話を頂きました。個人が抱えている小さな「もやもや」はコミュニティや社会全体が抱える問題と密接につながっています。ゆえに、問題の対処は行政・企業だけが担うのではなく市民自らも社会の担い手として声を上げ、やりたいことをかたちにしていくことが求められます。そのために、行政や企業の役割は自律分散型の「活動を可能にする役割」にシフトチェンジすることが求められると川地氏は指摘します。

川地氏は個人の「もやもや」に着目したプロジェクトも進めています。「産むこと」を対象に、当事者、参加者、アーティストで1つのチームを作り、「産むこと」にまつわるテーマについて深く対話してもらいながら作品の制作を行ってもらいます。作品制作の過程では、参加者から個人の体験にもとづく「もやもや」を引き出し、「もやもや」をもとに新しい世の中を想像する（もしも・・・一人だけで子どもを生むことができてそれが当たり前だったら？など）ことで、家族のあり方や産むことに対するイノベーション（既存価値観の転換）を構想したとのことでした。（筈谷友紀子）

事務所だより

大　阪

緒方洪庵先生、ありがとう

大阪事務所　倉見祐子

出会いと別れの春が過ぎ、大阪事務所では２名の新入所員を迎えました。

人が資本であり、商品でもあるアルパック。ケイパビリティを高めるために、採用や人材育成は今後より一層注力したい領域です。既にご存じの方も多いかと思いますが、大阪事務所があるビルの隣には緒方洪庵の適塾がありました。医師・蘭学者としてだけでなく、教育家としても優れていた洪庵。塾生に対して怒ることはめったになかったそうですが、学問の本質を学ぶことについてはかなり厳しく指導したそうです。例えば洋書の翻訳をする際にも、「単に言葉ひとつひとつを正確に訳すのではなく、話の本質・本筋を捉え、平易な言葉で誤りなく相手に伝えることが大事だ」と教えを垂れた、と聞いたことがあります。

人に何かを伝える際、「正確」に伝えようとするあまり、要点がわかりにくくなったり、相手の理解が追いつかなくなったりしてしまうことは、私も多々あります。大切なのは「本質を伝え、相互理解に至ること」。そして「怒らないこと」！

毎朝毎晩、緒方洪庵像の横を通り過ぎながら、反省を繰り返しています。

事務所近くの緒方洪庵像

『まちの町医者　備忘録』　アルパック名古屋４０年。想い出す記憶を 12 章にまとめ、風媒社 (名古屋) から出版

尾関利勝：顧問

京都から名古屋に移り、仕事を始めた頃、私の職能を「まちの町医者」と自認するようになった。村･まち･地域を調査・計画することは、人の心と体を診る医者と似て「まちの町医者」に例えられる。愛読書・山本周五郎「赤ひげ」の影響がある。

後期高齢者になり、改修した小さい町家での京都住まいを復活しようとする同じ頃、アルパック名古屋を開設して 40 年、建築を基点とする計画系シンクタンクとして何をしてきたのか、ふと気になり、想い出す記憶のままに『まちの町医者　備忘録』を書き始めた。

記憶は記録と違い、時系列や空間配列とは無関係に印象の強い勝手な想い出が連鎖し、第三者には読みにくい構成になる。読み易くするため、時に用語解説やエピソードを加えた。書きながら想い出すのは人。結果は出会った方々を記述する尋ね人のような備忘録になった。備忘録の 40 年は戦災復興以後の地方自治・国土計画・都市計画・都市整備・文化財・環境保全・産業振興・空港・港湾の法が現形になる過程であった。ここにも着目して頂きたい。

令和３年（2021）春に思い立ち、全体が見えたのが令和５年（2023）春。正味３年、記憶の書き起こしに没頭。幾久しく忘れていた熱い集中だった。

脱稿の頃、名古屋の「風媒社」編集の林桂吾さんを尋ねた。林さんとは「やっとかめ文化祭」（名古屋市）の「亀山巌」（元名古屋タイムス社長・豆本収集家、青春期の私の助言者）の著作展示・講演会で親しくなった。凡そ 300 頁が文字だけの単調さを補うため、名古屋の空撮（東鮓･横井行風氏同行､ヘリにて地上 300 m、時速 200km）を各章に使用。この備忘録の特徴である（著作権は尾関）。

初校以後８ケ月かけて編集･校正、令和６年（2024）４月、足掛け４年で上梓となった。それでも誤字を遺した。関係の方にはお詫びを申し上げる。

〔レターズアルパック〕245号　2024年5月発行（株）地域計画建築研究所　https://www.arpak.co.jp

まちかど

街のコモニング～台中市の「道路・歩道政策策定フォーラム」に参加して～

中塚一
代表取締役社長

3月22日に台湾の台中市で開催された「道路人本環境政策発展論壇」で講演する機会があり、市内各地で様々な関係者と意見交換する場を頂きました。

アルパックでは、奈良女子大学と台湾の台中市にある朝陽科技大学・東海大学との国際研究交流に関係される先生方とのご縁があり、2016年度より参加・支援させていただいております。今回、台中市が開催されるフォーラムにおいて、御堂筋の歩行者空間化を中心とした大阪のパブリックスペースの再編について講演する機会を頂きました。

旧市街地と新市街地とを何で結ぶのか？

台中市には、日本統治時代からの古い建物が残る旧市街地と、開発が進む新市街地とが共存しています。旧市街地は碁盤の目状に区切られており、建物の1階部分は道路から引っ込んで歩行者空間になっている古い建物が多く残っています。中国式長屋の形式で、アーケードのような部分は亭子脚（ティンツチャオ）と呼ばれています。

一方、新市街地にはセットバック型の高層マンションや業務ビル、高級ホテル、市役所、文化施設などが集積し、2021年に新幹線台中駅と新市街地を結ぶMRTが開通しています。新市街地と旧市街地とを結ぶ交通網は2014年にBRTが試験的に開通しましたが、運用面での不備、市民の反対運動等により廃止され、優化公車専用道として運用されています。現在、2034年開業でMRTが再度計画されているとの事でした。

アーケード「亭子脚」のオープンキッチン的利用

旧市街地での台中中区再生基地の活動

旧市街地では、近年、古い建物をリノベーションしたスポットが相次いで生まれています。有名なスイーツ専門店に生まれ変わった「宮原眼科」は、今や台中を代表する観光スポットとなっています。今回はフォーラムの前日に、旧市街地の再生に取り組んでおられる「中区再生基地」の東海大学蘇先生との意見交換の場を設けて頂きました。蘇先生は旧市街地に住居を移転され、1階部分を店舗、2階部分をエリアの交流拠点として開放されています。各種イベントの開催、情報誌の発刊など、日本で私達が取り組んでいる中心市街地再生と共感する部分が多かったです。意見交換の場では、徒歩圏内に老舗や新しい店舗などが立地し始め、地域の物語を大切にリア・リノベーションに取り組んでおられる姿が印象的でした。

亭子脚のリ・コモニング

台湾の街並みの特徴である亭子脚は、本来は民地内の歩行者空間ですが、経済成長と共に車やバイク利用が多くなり、現在はバイク置場や沿道店舗の屋外テーブルが置かれオープンキッチン的利用がされている箇所が多いです。今後、車から人へのウォーカブルなまちづくりを進めるためには、放置自転車問題が大きな課題ですが、台湾では亭子脚の再度の歩行者空間化が大きな課題になってくると感じました。

台中市主催フォーラムの登壇者と関係者による記念撮影

表紙写真：嵐山　祐斎亭（撮影　中村孝子）

「レターズ アルパック」は、ホームページからもご覧いただけます。

arpak
アルパック（株）地域計画建築研究所
Architects, Regional Planners & Associates, Kyoto
https://www.arpak.co.jp　E-mail：info@arpak.co.jp

本社・京都事務所	〒600-8006 京都市下京区四条通柳馬場西入立売中之町 99 四条 SET ビル 2F	TEL(075)221-5132	FAX(075)256-1764
大阪事務所	〒541-0042 大阪市中央区今橋 3-1-7 日本生命今橋ビル 10F	TEL(06)6205-3600	FAX(06)6205-3601
名古屋事務所	〒450-0001 名古屋市中村区那古野 1-47-1 名古屋国際センタービル 7F	TEL(052)462-1030	FAX(052)462-1061
東京事務所	〒101-0032 東京都千代田区岩本町 3-1-9NOVEL WORK Iwamotocho 5F	TEL(03)5244-5132	FAX(03)5244-5140
九州事務所	〒810-0802（株）よかネット：福岡市博多区中洲中島町 3-8 福岡パールビル 8F	TEL(092)283-2121	FAX(092)283-2128
滋賀営業所	〒527-0012 東近江市八日市本町 9-14	TEL(0748)36-2065	FAX(0748)36-2168

再エネ100宣言 RE Action
この用紙は「びわ湖の森を元気にする」kikitoペーパーを使用しています。